

庄内藩校「致道館」の設立と教育方針に関する考察

Research on the Establishment Background and Educational Policy of the Former Domain School of the Shonai Domain “Chidokan”

青山 和弘*

Kazuhiro Aoyama

概要

明治時代以降の近代的な教育制度に基づく統一的な教育とは異なり、江戸時代は厳格な身分制の下、教育は武士、武士と庶民、庶民（特に子ども）のそれぞれに分かれ、多様性をもって展開されていた。その中で当時、支配身分であった武士に対する教育は、江戸幕府直営の昌平坂学問所をはじめとして諸藩の藩校が担っていた。本稿では江戸時代の教育機関を概観したあと、藩校の一つである庄内藩の致道館を取り上げて設立の背景や教育方針等について考察する。

1. はじめに

江戸時代には、強大な領主権をもつ将軍（幕府）と大名（藩）が土地と人民を統治したが、このような支配体制を幕藩体制という。国内は幕府の直轄領と250以上の藩の所領とに分かれており、幕府の行政的な支配は直轄領には及ぶが、幕府は圧倒的な経済力と軍事力で諸大名を統御しつつも、藩内の統治は原則としてそれぞれの大名に委ねていた。

幕藩体制下の社会は封建制の社会構造に基づき、武士を主とする支配身分と、百姓や職人、町人などの被支配身分（庶民）とに大別され、格差を伴う身分制がとられていた。こうしたことは江戸時代の人々の社会生活や文化にも影響を及ぼしており、教育においても武士に対する教育と庶民に対する教育との間には大きな差異がみられた。

本稿では江戸時代の教育機関を概観したあと、武士の教育を担った藩校に焦点を当て、その一つである庄内藩の藩校「致道館」を取り上げてその設立の背景や教育方針等に着目してその使命と役割を考察する。

2. 江戸時代の教育機関

江戸時代は封建制を基礎に置いた社会であることから、武士に施される教育と庶民に施される教育は自ずと異なるものであった。支配身分である武士は支配者・指導者として必要な儒学の学識と教養（徳）、武芸を身に付けることが求められ、そのために諸藩で設けられたのが「藩校（藩学）」（以下「藩校」という。）である。その一方で被支配身分

である庶民は生活の必要、かつ基礎的な「読み」「書き」「算用」を学ぶことで日常生活に必要な教養を身に付けることが求められ、そのために私設の簡易な学校として都市や村々に庶民の子どもを対象にした寺子屋がつけられた。このように藩校と寺子屋という二系統の学校が並立して、それぞれ独自の発達を示したところに近世の教育の特質を認めることができる⁽¹⁾。

このほか、藩主などが藩内に設けたもので庶民や武士にも門戸を開いた郷校（郷学）や、学者や芸能者が私宅に教場を設けて志のある武士や庶民を分け隔てなく受け入れて儒学や蘭学などを講じた私塾などがあった。その中には「学術の伝習を緊密な師弟関係の下で進める、自主的なアカデミーとしての性格」⁽²⁾をもつものもあった。こうした私塾は、封建制身分社会の中で武士と庶民の別なく教育や研究の機会を提供したところに特色がある。

3. 藩校の設立

江戸時代、支配身分である武士に対する教育機関には、幕臣などの子弟が学んだ江戸幕府直営の昌平坂学問所と各藩が主として藩士の子弟の教育を行うために設立・運営した藩校がある。

3.1 昌平坂学問所

江戸時代に入り、学問では儒学が盛んになったが、その中でも室町時代に五山の禅僧が学んでいた朱子学は君臣や父子の別をわきまえ、上下の秩序を重んじることを重視していたことから、江戸幕府（以下「幕府」という。）や諸藩に多く受け入れら

*北海道科学大学全学共通教育部基盤教育グループ

れた。

相国寺（京都）の禅僧であった藤原惺窩の門人で朱子学者の林羅山は徳川家康に用いられ、以後家綱まで4代の将軍の侍講として仕えたが、1630（寛永7）年に3代将軍家光の援助を受けて上野忍ヶ岡に書院などを設けて家塾とした。さらに1632（寛永9）年には尾張藩主徳川義直から孔子像と祭器、孔子廟が寄進された。その後、林家のこの家塾と孔子廟は1691（元禄4）年に5代将軍綱吉によって湯島に移された。老中松平定信が主導した寛政の改革の下で1790（寛政2）年に幕府は朱子学を正学とし、湯島聖堂の学問所で朱子学以外の講義や研究を禁じた。これが「寛政異学の禁」といわれるもので、その対象はこの学問所に限られたものであったことから、朱子学以外の学問の弾圧を意図したものではなく、藩校や民間の学問の多様性は否定されてはいなかったが、これ以後朱子学は「各地の藩校でも採用」⁽³⁾されるようになった。

そして1797（寛政9）年、幕府は林家の家塾であるこの学問所を幕府直営（昌平坂学問所、通称を昌平黌）とし、講堂や学舎などの施設・設備を拡充した。昌平坂学問所の教育の対象は幕臣とその子弟に加えて諸藩の藩士にも門戸が開かれていたことから、「全国の武士教育の中心」⁽⁴⁾になった。この学問所で学んだ藩士の中には自藩の藩校の教官になる者もいたことから、諸藩の藩校の教育制度や教育内容等にも大きな影響を与えた。

3.2 藩校

藩士やその子弟の教育のために藩が設立した教育機関が藩校である。藩校には全国共通の教育方針や指導方法はなく、それぞれの藩がその藩の方針や実態に応じて定めていた。

藩校設立の経緯に着目すると、一つには学問に関心の高い藩主が儒学者を招いたり、藩士に儒学者の家塾で学ぶことを奨励したりする中で、藩営の教育施設が設けられ、その後整備・拡充されて設立された藩校がある。その一例が紀州藩の藩校学習館である。後に8代将軍となる5代藩主徳川吉宗が1713（正徳3）年に藩営の学校として「講釈所」（後に「講堂」に改称）を設け、1791（寛政3）年に10代藩主徳川治宝が講堂を整備・拡充し、聖堂を設置して学習館と命名した。

二つ目としては、藩内で儒学者などが開いていた私塾や家塾が藩営とされて成立した藩校がある。その一つが岩槻藩の遷喬館である。遷喬館は1799（寛

政11）年に岩槻藩士で儒学者の児玉南柯が開いた私塾で、1800年代初めの文化年間に藩校になり、藩士の子弟が学んだ。

三つ目は、18世紀半ば以降多くの藩が取り組んだ藩政改革の下で藩政を担う人材育成のための教育機関として設立された藩校がある。こうした藩校は組織や教授内容、施設・設備、規則等が整備され、学校として「組織的な藩士教育」⁽⁵⁾が行われた。その一つが熊本藩の時習館である。時習館は6代藩主細川重賢の下で進められた藩政改革（「宝暦の改革」）の一環として人材育成を図ることを主な目的とし、教授（学長）に林鳳岡から朱子学を学んだ秋山玉山を迎えて1755（宝暦5）年に開校した。このほか鳥取藩の尚徳館や福岡藩の修猷館、薩摩藩の造士館などがあり、本稿で取り上げる庄内藩の致道館もその一つである。

4. 庄内藩校致道館の設立

新田源氏を祖とする酒井氏は「徳川氏と同祖の家柄」⁽⁶⁾であり、松平氏（後の徳川氏）に長く仕えていた。江戸時代に入り、1623（元和8）年に幕府は山形城主最上義俊を藩内不統一を理由に改易し、57万石を没収した。その最上氏旧領のうちの庄内13万8千石が酒井忠勝に分与されることとなり、忠勝は松代10万石から庄内に入部し、初代庄内藩主となった。その後、江戸時代を通じて酒井氏は現在の山形県庄内地方のほぼ全域を藩領として治め、明治維新に至った。

4.1 設立の背景

藩校設立に深く関わったのは、7代藩主酒井忠徳である。忠徳は1755（宝暦5）年生まれ、1767（明和4）年に家督を相続した。ちなみにこの年には、上杉治憲（上杉鷹山）が米沢藩主となり藩政改革に着手している。

忠徳の時代の庄内藩は、たび重なる飢饉による農村の疲弊や江戸での出費、幕府による御手伝い普請の出費などによる多額の借財により藩財政が逼迫していた。1772（安永元）年、参勤交代で忠徳が江戸から庄内に初めて入部する際に苦慮したことが、『酒井家世紀』に次のように記されている⁽⁷⁾。

同年六月十三日、はじめて暇を賜りて封に就く。是時、財政困難にして旅費の金額江戸にて調達し難しとて、半額は駅路の中央迄庄内より送り越すべき計を定めけるに、公、福島に至りたるも送金

達せざりければ、出納の役人、為す処を知らず。有りの俣に言上せり。公、暫く黙然として後、十四万石の分限にて百里の路だに旅費を給する能はず。何を以て藩屏の職を奉ずべきとて両眼に涙を浮かべ慨嘆せられけり。然るに、送金の遅滞せしハ東風吹きすさみ最上川上り船なり難くして予期に違ひたりとて、是日の暮に福島に着せしかば、公ハ一日も滞留せずして七月七日領地にぞ着かれける。

藩政の危機は農村の疲弊や財政の逼迫だけではなかった。藩士の土風の頹廢も大きな問題になっていた。江戸の華美な風潮は庄内にも広がり、家中の服装は贅沢になり、縮緬や紗、綾、八丈縞、上田縞などを着用したり、茶屋や遊郭に遊び、芝居を好み、中には博奕を打つ者も現れた。こうした状況の中で家計が窮乏する藩士や、役人の中には富裕な者と結び政道を曲げて私腹を肥やす者もみられるようになった。また、粗野で礼儀をわきまえず、町人や百姓、猟師などと喧嘩をしたりする者、徒党を組み、氣に合わぬ者の家の門扉を打ち壊し、魚脂や糞尿を投げ入れる者もみられるなど、土風の頹廢は実に嘆かわしい状況であった⁽⁸⁾。

藩政改革を進めていた忠徳は、こうした状況を深く憂慮し、郡代を務めていた白井矢太夫にその対策を諮問したことがあった。それに対して矢太夫は意見を述べたが、その内容は、矢太夫の実弟である白井固が矢太夫の言行などを記録した『野中の清水』に次のように記されている⁽⁹⁾。

いつはかりの頃にか有りけむ、御前（忠徳公）に召れ給ひし時、物語の序に、仰られしは、藩士の風俗みだりかはしく、役人といへばやゝもすれば、私の事を為し、あるは博奕をし、又、若きものは遊所に行みだりなる振込みをし、夫のみならず町人風ぜひの者と喧嘩せしなどゝいうこと絶ず、あるは大勢徒党して天狗風などゝ唱へ、人の門扉を打ちこはす類ひもありけれ。此事を患ること数年、それぞれに世話をもすれど、其時には少し事少きやうなれど、又いつしか程なく元の如く成行也。是は一跡家法のゆるがせより出る事とおもへば、かゝる類の事は嚴重に懲るばかりなる仕置も有るべしとおもへど又、若きものゝ一端心得違ひなるもあることにて家中のものといへども、皆己が代に取

立てしものにもあらず、先代の労ありて数代奉公せし者の家を、只吾人の若気の過により其家を断んこと忍ぬことにもあれど、いかゞせむとおもふこと仰せられける（以下略）

忠徳からのこうした諮問に対して、矢太夫は次のように答えた。

是はありがたき思召にてまことに御人徳とこそ申べけれ、扨、此事は寓意に慮り候に、治世の永く続きてひとの心、柔弱に成行弊にて、廉恥のなきより致す所にて候へば、急には中々行直りがたきことにやと、恐ながら存奉るなり、たとひ嚴重の御沙汰に及ばるゝ共、其当時斗のことにて悪き者は絶えぬ習に候へば、罪人のみ多く成候はん、もし此風俗を御改可被遊思召候はゞ、迂遠なるやうには候へども、学校の教にあらざれば行べくも候はず、されど卒にことなるべき義にては候はず、数十年を経て人々恥をしるやうになり、又、御役人をも大抵は学校中より御撰び遊ばし候やうに成候はゞ、末々は自然に此風俗も改るべしやと申上給ひし（以下略）

矢太夫のこのような答申に対して忠徳は「けにさる事もありなん」⁽¹⁰⁾と同意している。忠徳と矢太夫は土風刷新、人材養成には学校の設立と教育の振興が必要であることを共有したといえる。しかし、その後、忠徳からは諮問や指示などもなく数年が経過した。

4.2 学校の設立

庄内藩は天明の大飢饉（1782-88）による藩内の農村の疲弊、加えて1788（天明8）年の幕命による東海道川普請手伝いの出費が藩財政を圧迫していた。1789（寛政元）年には山浜通代官和田伴兵衛が「口上書」を提出し、農民困窮の原因が年貢の過酷さであることを指摘し、特に1783（天明3）年以降が顕著であると主張した⁽¹¹⁾。

1792（寛政4）年秋に忠徳が帰国すると、諸役人に対して郷村を救う方策を諮問して建白書を募った。忠徳は其中で大胆な農政改革の断行を主張した白井矢太夫の建白を採用し、改革の開始を決心した。『酒井家世紀』には「庄内藩の寛政改革」⁽¹²⁾の開始について、次のように記されている⁽¹³⁾。

是年、矢太夫を郡代に転じ、同じき七年、家老

酒井吉之丞・竹内八郎右衛門、郡代服部八兵衛及び矢太夫に改革用懸りを命ず。同じき八年四月、矢太夫に命じて改革の要目を記して進めしめ、予が意に符号せりとて、悉く其旨に従はる。

この改革は郡代白井矢太夫の立案によるもので、徳政による困窮者の救済、農民の諸税負担の軽減、備荒制度の整備などが推進され、「農民は極端な誅求から解放されて小康を得」⁽¹⁴⁾た。その様子は『酒井家世紀』に次のように記されている⁽¹⁵⁾。

領内二郡の百姓ハ大旱に雨を得たるが如く、其仁政に感泣せざる者なかりけり。遂に漸を以て八組の産を制し、備荒の貯蓄、貧民救恤の米金等、府庫を仰がずとも常に余り有るに至れりと云ふ。

寛政の農政改革によって藩財政が危機を脱したことから、忠徳は1800（寛政12）年、家老服部円蔵、郡代白井矢太夫を学校御用掛に任じるとともに、大宝寺（城下の東北郊の地）に学問所を建てることを命じた。1801（享和元）年には「学校」と称するために聖像（孔子像）を祀ることを幕府に願い出て許可された。同年、聖廟から建設に着手し、続いて諸施設が建てられて1804（文化元）年12月に工事を終えた。この時の施設は、聖廟、神庫、書庫、御入の間、講堂、養老堂、会業の間、典学詰所、勘定詰所、御台所、矢場、武芸稽古所などで、「江戸の昌平坂学問所をまねて、その小型な構え」⁽¹⁶⁾といえるものであった。

1805（文化2）年2月、「学校落成（建設懸り家老服部円蔵・組頭松平武右衛門、郡代白井矢太夫・普請奉行竹内大作）」⁽¹⁷⁾し、致道館と名付けられ、同月晦日には、先聖（孔子）・先師（顔淵）を祀る儀式である釈奠が執り行われて開校した。釈奠はその後毎年二月と八月、戊辰戦争による混乱の秋を除いて執行された⁽¹⁸⁾。

ちなみに、致道館という校名は『論語』の「子夏曰わく、百工は肆に居て以てその事を成す。君子は学びて以てその道を致む。」⁽¹⁹⁾から名付けられた。

5. 致道館の組織と教育の目的・方針等

開校に当たって忠徳は、総奉行服部円蔵に命じて教職員の任命を行うとともに、教育の趣意書として「職掌別被仰出書」を与えた。

5.1 職制と教職員

開校当初の致道館の職制等は次のとおりである。
表 主な職制等

職名	定員（人）	主な職務	就任資格
総奉行	1	最高監督者、重要事項の決裁	家老又は中老
副奉行	1	監督者 総奉行代理	組頭
祭酒	1	学校の最高責任者、釈奠を司る	小姓頭（600石前後）以上の士
司業	2～3	教育の責任者	行列以上（300石）以上の士
学監	2～3	学校の総取締	同上
助教	14～15	学業の教授、主に会業を司る	士分以上
典学	5	事務担当 子弟の監督	同上
句読師	9	年少子弟の読み・書き指導	同上
司書	2	図書担当	同上
地盤掛	典学兼務	学校の経理	同上

出所：鶴岡市編『史跡旧致道館 致道館記並びに工事報告書』（1970）、致道博物館『中興の祖 酒井忠徳と庄内藩校致道館』（2022）より一部改変。

今日の学校における管理職にほぼ相当する、祭酒（司業兼務）には白井矢太夫、学監（司業兼務）には服部純蔵、犬塚祐吉、白井惣六郎（固、矢太夫の実弟）が任命された。

5.2 教育の目的・方針等

忠徳は、祭酒・司業、司書、助教・典学兼助教、学監、句読師に対して開校の趣旨や教育の目標、教育方法、管理や指導上の留意点などを職掌別に示した。特に「校長に当たる祭酒」⁽²⁰⁾・司業に対しては、教育の根幹といえる開校の趣旨などを次のように示した⁽²¹⁾。

- 一 今度思召し学校被仰付候ハ、諸士之輩、孝悌ハ勿論、文武之業相勤め、国家之御用ニ相立候人物追々出候様被遊度御趣意之事
- 一 当時文武之官不相分、如古代ニ候得バ、文武兼備勿論之事ニ候得共、天性得手・不得手有之者ニ候得バ、其人之長所成就候様、

常ニ評議を遂げ可及訓導事

- 一 以経術正其身、通古今達人情知時勢、斯く之如き人物ハ誠に国家之大宝ニ候得共、兼備之大儒ハ容易ニ出でざる者之由、時々遂評議、天性大なるべき者ハ大成致し、小なるべき者は小成致し、各其材を尽し候様教育肝要ニ候、都て孝悌忠信にて芸能有之者、国家之宝ニ候条、不違御趣意、助教之輩へも申達し可及訓導事
- 一 少年之輩、肄業之次第肝要ニ候得バ、諸生之学力時々助教輩と及評議會業等相極め、教育之序不乱様可致事
- 一 不達詩文之輩ハ章句之学にて難明経義と云なり。和人転倒之読ニ候得バ、其弊最甚敷由、詩文之法も不一樣故、学之天性、得手・不得手有之由、篤と遂評議、性質近所致成就候様可及訓導事
- 一 諸生之学問、経書之類ハ細密にて百家之類ハ大略ニ候得バ、寡見・粗略之弊自然鮮と云なり。其天性ニより長短出候ハ格別、教授之偏より弊不出様、時々諸生之学問教授之輩相尋可及評議事
- 一 若助教之輩、各所存を以て一概之教訓有之、諸生之業ニ指障り可申と存候儀有之節ハ、祭酒・司業遂評議、一再申諭、不相用之者、惣奉行へ祭酒可申聞事
- 一 書生之中、東漢以下之書読申度と相望輩有之節ハ、篤と衆議之上相許可申事
- 一 学校中詩文之作、追て御用之儀も可有之間他邦へ示し候ても可宜哉と遂評議候分ハ、追々為書留冊ニ致し置可申事
右之条々御趣意之大略、可達置旨被仰出候、尤学校御役人之外、他見・他言有之間敷候

文化二年丑二月

最初に、致道館における教育の目的を「孝悌は勿論、文武の業に励んで、藩の御用に役立つ人物」の育成とし、こうした人物は「孝悌忠信を土台として、芸能これある者」であると述べている。学校設立の背景を踏まえれば、士風の刷新を強く願った忠徳の考えが強く示されているといえる。

ここでいう芸能については「経術を以てその身を正し、古今に通じ、人情に達し、時務を知る」ことができる資質・能力とし、こうした力を身に付けた

「大宝」を育成することが求められている。

次に教育上の方針として、「詩文」を重んじるとともに、白文を読むことで「経義」を明らかにすることを重視している。また、「東漢（後漢）以下の書、読みたしと相望む輩」がいた場合は、職員が評議した上で許すとしている。これらは、いずれも古典を通じて直接孔孟の思想に立ち返ろうとする徂徠学派の立場に立つものであり、「徂徠学を根本」⁽²²⁾に据えて教育を進めることを意味している。

教育方法では、「天性、得手・不得手これあるものに候。その人の長ずる所成就」するように常々評議を行って指導すること、「天性大なるべき者は大成致し、小なるべき者は小成いたし、各々その材を尽くし候やう教育肝要に候」であるとし、一人一人の天性に着目してその素質や個性を十分に伸長させることを重視している。そのため、助教や典学兼務の助教に対しては、祭酒・司業と評議して一人一人の天性に反することのないように留意し、長所と短所を把握して適切に指導するよう指示している。教育方法に対するこのような考えと指導方法も徂徠学派の影響を強く受けている。

5.3 入学資格等

致道館における教育の対象は、当初は数え年で9歳になった士分（上級の藩士）の子弟に限られていたが、助教・典学兼助教に与えた「被仰出書」では「御給人以下好学之者、学校勝手通りニ罷出度旨相望候はゞ、評議之上相許可申候、若秀才拔群之者有之候はゞ、祭酒・司業へ申聞可及訓導事」⁽²³⁾とされ、給人の子弟でも入学を希望する者があれば「評議の上」入学が許可された。しかも「秀才拔群之者」については祭酒・司業に上申するよう命じている。このような対応は、士風の刷新、有為な人材養成を目指すという教育の目的に沿ったものといえる。

6. 致道館の移転と拡充

致道館が開校した1805（文化2）年の9月に忠徳は「仕を致し左兵衛佐」⁽²⁴⁾と称し、忠器が家督を継ぎ8代藩主となった。

忠器は1815（文化12）年4月、家老水野内蔵丞を転校用掛主任に命じるとともに、大宝寺の地にあった致道館の三の曲輪十日町口（現在地）への移転を布告して工事にとりかからせた。工事は翌16（文化13）年9月に完了し、移転した。移転の動機は、政治の指針と方式とを産み出すものが学校であり、学問を修めるところが学校であるという考えに基

づき、藩の政務を執る会所と学校との統合、いわゆる政教一致にあったといわれている⁽²⁵⁾。

新しい致道館では施設の拡充が行われ、西の間、中の間、東の間、北の間という専用の教室などを備えた句読所や 13 の部屋からなる本舎と外舎が新設されたが、こうした施設は、子弟一人一人の学力の程度に対応できるようにするためのものであった。

致道館のこのような「教場の配置は、徂徠学派が主張する学習方法—学力の進歩に即応して教場をとりかえて行く仕方、講義・講釈を排斥して読書と会読と詩文研究とを重じた課業形態の最もふさわしい姿をとっている。このような建築の構造をもつた藩学は、時習館（熊本藩）を元祖として、稽古館（彦根藩）・日新館（会津藩）など次ぎつぎに現われたが、致道館になって完備した」⁽²⁶⁾といえる。

この移転・拡充によって致道館の教育制度や教育課程などが整い、酒井忠徳と白井矢太夫が目指した士風の刷新と、孝悌を重んじ文武に励んで藩の御用に役立つ人物の養成が一層、本格的に進められるようになった。

7. おわりに

本稿では、江戸時代の教育機関としての藩校の位置付けとともに、江戸時代後期の庄内藩が置かれた状況をもとに、藩校致道館設立の背景（経緯）と教育方針等を取り上げた。

致道館では、祭酒白井矢太夫を中心として教職員が「被仰出書」の趣意を体して藩の子弟の教育に尽力するとともに、子弟たちも学問を尊び、互いに実践窮行を競うようになったことで、「士風も次第に改まり、数年にして華美・驕奢の風も消なくなり、粗暴・無頼の徒も影をひそめるに至った」⁽²⁷⁾という。そこで、こうした成果をもたらした「致道館教育」について、移転後の教育制度や教育課程、教育方法の特色を明らかにするとともに、教育の在り方としての意義等を別の機会に考察することとした。

参考文献

- (1) 文部省：学制百年史，帝国地方行政学会，p. 7，1972.
- (2) 文部科学省：学制百五十年史，ぎょうせい，p. 9，2022.
- (3) 藤田覚：日本近世史⑤幕末から維新へ，岩波書店，p. 99，2015.

- (4) 藤田覚：前掲書，p. 102.
- (5) 藤田覚：前掲書，p. 98.
- (6) 斎藤正一：庄内藩，吉川弘文館，p. 6，1990.
- (7) 三好康著/致道博物館編：酒井家世紀，致道博物館，p. 181，2022.
- (8) 鶴岡市役所編：鶴岡市史（上巻），鶴岡市，pp. 364-365，1962.
- (9)，(10)，白井固著/荘内社編：野中の清水（二），荘内 10 号，荘内社，p. 4，1938.
- (11) 斎藤正一：前掲書，p. 115.
- (12) 斎藤正一：前掲書，p. 118.
- (13) 三好康著/致道博物館編：前掲書，p. 197.
- (14) 鶴岡市役所編：前掲書，p. 364.
- (15) 三好康著/致道博物館編：前掲書，p. 197.
- (16) 石川謙：日本学校史の研究，日本図書センター，p. 409，1977.
- (17) 三好康著/致道博物館編：前掲書，pp. 202-203.
- (18) 山形県教育委員会編：山形県教育史通史編（上巻），山形県教育委員会，p. 63，1991.
- (19) 貝塚茂樹訳注：論語，中公文庫，p. 549，2020.
- (20) 斎藤正一：前掲書，p. 202.
- (21) 三好康著/致道博物館編：前掲書，pp. 203-204.
- (22) 鶴岡市役所編：前掲書，p. 369.
- (23) 三好康著/致道博物館編：前掲書，p. 204.
- (24) 三好康著/致道博物館編：前掲書，p. 207.
- (25) 石川謙：前掲書，p. 411.
- (26) 石川謙：近世の学校，高陵社書店，p. 141，1957.
- (27) 鶴岡市編：史跡旧致道館 致道館記並びに工事報告書，鶴岡市，p. 25，1970.